

朝鮮学校における「よそ者」研究

——朝鮮学校を「訪れる」人々の事例から——

一橋大学大学院 趙少曦

1 目的

本報告の目的は、修士論文における研究成果をまとめ、今後の研究の方向性を示すことにある。現在までの報告者の研究は、朝鮮学校という「空間」と日本社会の人びとの関わり方を見ていくものであった。修士論文では、①自分の興味・関心に合わせて朝鮮学校を訪れる人々が朝鮮学校に来るまでの経緯と、②日本社会の人びとと朝鮮学校のアクター（学生・保護者・教職員など）たちの朝鮮学校（もしくは朝鮮学校と関わる「場」）における相互行為に焦点を当てた。

2 方法

2016年9月から現在まで参与観察とインタビュー調査を行っている。そのうち、2018年6月～8月までの3ヶ月間は、インタビュー調査を集中的に実施した。その結果、朝鮮学校を訪れた20名（男10人、女10人）と学校関係者7名（男4人、女3人）から話を聞くことができた。分析視点としては、ジンメル「よそ者」を採用した。つまり、朝鮮学校を「訪れる」人々は朝鮮学校側にとっては、「よそ者」であるという見方である。そして、予備調査、文献などを通じて、「よそ者」が朝鮮学校を「訪れる」状況を4つの類型に分けてみた。まず縦軸に〈朝鮮学校との関わり〉を置き、朝鮮学校と対象者の間にどの程度の心的距離があるのか、その状態（行為の結果）を見る。続いて横軸の〈「訪れ」の自発性〉は、「訪れ」において内部的要因（興味、関心など）、外部的要因（人間関係、仕事など）のどちらが優位にあるかという行為の動機を見る。関係の形成から維持までのスパンを見る〈関わり〉に加え、関係形成が始まるまでの〈自発性〉をクロスさせることで、より多くの人を研究対象として取り入れることができ、分析の視野も広がった。

3 結果

ある程度「訪れ」の類型化が進むと、それを基にインタビューデータをまとめ、次の2点が明らかになった。すなわち、①日本社会の人々は主に、朝鮮学校支援・見学・施設の利用・支援団体活動への参加・学校と支援団体によるイベントから「訪れ」を経験していること、②《空間共有・接触》タイプのように、相対的に朝鮮学校とのつながりが弱く、自分の興味・関心に合わせて朝鮮学校を訪れる人々がいるということである。これらから修士論文において報告者は、「朝鮮学校は日本社会に根ざしている」という結論出した。しかし、上記の研究からは以下のような指摘ができる。①類型化の問題（類型化する必要性があったか、2つの軸がはっきり対比できていない）②「根ざす」という言葉の曖昧さ

4 結論

以上の限界から今後の研究では、「日本社会において朝鮮学校は異質な存在である」という前提から離れる必要がある。テーマも「日本社会における朝鮮学校の『境界』のありよう」に変えた。そうすると、「根ざす」を使う理由もなくなる。類型化に関しては、軸の設定から間違っているため、その作業は保留にして、まずはこれまでの調査データをまとめる作業に入る。

参考文献

趙少曦, 2019, 「朝鮮学校『に訪れる』人々—朝鮮学校における『よそ者』研究—」一橋大学大学院社会学研究科2019年度修士論文。

Simmel G, 1908, Exkurs über den Fremden. in: Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung (=1999, 鈴木直訳「よそ者についての補論」北川東子編『ジンメル・コレクション』筑摩書房。